

日本の誇り 軍事力ではない

短大講師 吉井 美奈子

(京都府精華町 36)

誇りある日本を取り戻す――安倍晋三自民党総裁の言葉だ。「どんな誇りやねん」。父と苦笑していた矢先の、衆議院選挙での自民圧勝。憲法を改正し、自衛隊を国防軍に。集団的自衛権の行使を可能に。そう公約する安倍政権の誕生に、苦笑は強い懸念へと変わった。

「自主憲法制定」を公約に盛り込んだ「日本維新の会」が自民党と連携すれば、改憲が現実味を帯びてくる。

76歳の父は戦争で家族を亡くした。酔うと冗談で「鬼畜米英」と言い、げたを銃で撃たれながら戦火を逃れた話をする。そして、私たち3人の娘を米国に短期留学させ、海外との交流を温かく見守っている。技術者兼研究者であったことから、東

大阪の中小企業がどれほどすごい、世界に負けない技術を持っているか、いつも話してくれている。そこに私は、「力」ではない、日本の深い精神を感じている。

日本を強くするのは、軍事力ではない。領土問題などを力で解決しようとすれば、再び戦争を招きかねない。平和教育を受けた私も国を大切に思う心は強い。しかし日本を、「力」で守る政策には反対だ。子や孫を戦争にいかせてはならない。

今、若者の右傾化が進んでいるという。雇用不安の中、耳に心地よいナショナリズムに流されてはいないか。彼らには、軍事力に頼らぬ国際力こそ身につけてほしい。

平和憲法にとっては、来夏の参議院選挙が正念場である。一票に護憲の気持ちを込めたい。

手づくり民主主義 鍛えよう

無職 水戸 喜世子

(大阪府高槻市 77)

脱原発、護憲を訴える政党が軒並み負けた。自民党の政権奪還で、「原発ゼロ」の機運はそがれ、憲法改正によって再び戦争ができる国になるのか。いてもたってもいられない。

3・11以降、憲法の問題を最大限に駆使して、民主主義の権利を行使しようとする。福島の子どもを避難を国会議員や役人に求め、官邸に向かって脱原発の声を上げ、小さな駅前デモを配ってきた。こんな

体験を多くの日本人が共有したはず。この国が民主主義国家として成長する上で大きな財産になるだろう。国民が真に望むのはささやかな安心できる暮らしだ。原発や戦争ではない。

本屋さんで、質素な身なりのお母さんが赤ちゃんを抱き、「原発コーナー」に真剣に立つ姿に心打たれた。地震国に原発ある限り、安心な暮らしはないことを、政治家よりも市民が気付き始めている。政治の無策の中、市民の手作り民主主義が鍛えられていく。

他者への想像力 今こそ必要

会社員 田中 俊亮

(大阪市鶴見区 25)

自民党の安倍晋三総裁が発表した総選挙公約の中で、私が注目したのは「教育」と「憲法改正」だ。ここに今年大きな問題となっ

たいじめと、東アジア諸国との関係悪化が集約されている。だが、これらの項目の間には大きな矛盾があるように思える。

「国防軍の保持」を視野に入れた憲法改正には、日本がアジア・太平洋戦争で侵略した諸国の国民が持つ記憶への配慮、つまり他者への想像力が欠けている。支持する人々は、戦争が自分や相手にもたらす現実を想像したことがあるのだろうか。

自民党の公約が持つこの矛盾は、日本全体に存在していると思われる。だからこそ、私たちは他者への想像力について再考する必要があるのではないか。

「他者への想像力」を学ぶべきである。自分がされたら、という想像力の欠如がいじめや差別などにつながる。